



2000年10月 現場見学週間(その1)

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

授業が始まって1か月が経ち、やっと実習場となる東サリー病院現場見学の週が来た。本番の実習が始まるのはまだ先の来年2月だけれど、その前に一度現場に触れておこうというもの。同居人で同級生のシャメリーと「こんなの着るの嫌だなあ」とか言いながらも、前日までに制服の裾上げを済ませた。先輩学生のアドバイスどおり、初日から何でもメモできるようポケットにはメモ帳とペンを入れた。シャメリーはお義母さんが送ってくれたナース時計を胸につけていた。肝心の名札は業者の手違いから「看護学生」と印刷されたのが届いたので、助産学生は全員名札なしで行くことになった。

10月23日 初めての病院での1日

東サリー病院がカバーする地域には、助産学生5人、看護学生30人が配属される。まず初日はオリエンテーション、写真入りのアクセスカードを作成後は施設内の案内があった。

最初に案内されたのはITU(集中治療部)。大部屋に機械に囲まれた数台のベッドがあって、それぞれにスタッフがつき見守っている。一時も目を離せない病状の患者だけが集められた病室だった。その横には小さなベッドが一つある個室があって、そこが新生児のITUだと説明があった。忙しい中、大勢の訪問者を快く受け入れてくれた看護婦は、実習も始まっていない新入生にITUを見せるのは酷なこと、と申し訳なさそうだったけれど、患者一人ひとりを人間

として尊重していることが彼女の話から聞き取れて、そのぶん救われた思いがした。それでも助産を医療の入る必要のない自然なものとしていた学生や、病院にお世話になった経験のない私は、最初の見学でかなり気が重くなってしまったのを隠せなかった。この後早足で小児科、産科、救命救急室、それに図書館を見学して1日目は終わった。

2日目 マタニティユニット見学

翌日、助産学生は産科棟で1日を過ごした。サリー大学で教鞭をとる前の10年位、東サリー病院で助産婦をしていたジェーンが、昨日ゆくり見学できなかった産科棟を案内してくれ、助産婦たちを紹介してくれた。さすが元職場。ジェーンはすれ違うスタッフみんなと知り合いのよう。彼女は東サリー病院と大学との連絡・調整係で、この病院所属の助産学生24人の実習が問題なくできるように定期的に病院を訪れるし、実習中何かあったらまず彼女に相談できる。

見学した分娩室は白いベッドが真ん中に、医療機材が剥き出して壁際に置いてある他は殺風景で冷たくて、「病院」という印象だった。“自然な女性主体のお産を!”と理想高く入学してきた私たちは「ここで3年間実習するの?」と、なんだかとてもがっかりしてしまった。もちろん出産は全て病院で行なわれるわけではなくて自宅出産を希望する人もいるし、そのサービスは病院出産と同様に無料で行なわれる。けれども地

域の自宅出産率は2%ほど、と聞いてまたがっかりしてしまった。

午後は各人が担当助産婦について、いよいよ仕事を見学させてもらうことになった。私が行ったのは正常分娩ではなかった褥婦が入る棟で、6人部屋3室と個室があった。13時過ぎ、忙しそうな産褥室で私の担当助産婦ケリーにまず自己紹介をする。「あ、じゃあまず、この子抱いててもらえるかしら？お母さんがご飯を食べているところなのよ」と、ちっちゃな赤ちゃんを手渡された。新生児、しかも知

らない人の子どもを抱くなんて経験は初めてで、少し緊張しながら周りを観察していると、産褥室には助産婦3人、ケアアシスタント1人、事務員数名と、それに実習中の看護学生1人がいて、看護婦は見当たらない。この産科は助産婦によって運営されている(Midwife led unit)と分かった。産科医が一度回ってきていたけれど、細かいことは助産婦に任されているようで、私が見たときは問診と助産婦からの経過報告とで今後の治療を決めているようだった。

大部屋のベッドを仕切るカーテンの中にまずケリーが先に入って、「助産学生がいるんだけれど、見学してもいいかしら？」と聞いて女性のOKをもらってから「いいわよ、入ってきて」と私を呼び入れてくれる。最初に会ったのはさっき私が抱いていた赤ちゃんのお母さん。吸引でだめで帝王切開になった人だった。ベッドサイドで検診と問診をしている間も、ケリーは彼女の今までの経過を細かく説明してくれる。分からない単語がたくさん出てきて、あとで辞書を見て調べなくちゃと思いながら一生懸命メモをとった。

ケリーが忙しそうにしている間は、他の助産婦をつかまえて同行させてもらった。そこで出会った褥婦の横には、「どうしてまだ入院してい



私たちが共同生活している一軒家の自宅にて。血圧計を借りてきて夫のヒデンドラの腕で練習するシャメリー。着ているのが実習用の制服。

るの？」と不思議に思うほど健康で大きな赤ちゃんがいた。自然分娩だったけれど。分娩が早く進んでこの大きな子が腕を上げて出てきたために、第3度会陰裂傷を起こしてしまったとのこと。傷の治療にアーニカ(ハーブの名前)と痛み止めを続けて処方し、様子を見る。3人目は、個室で母乳を確立させようとがんばっているお母さんと小さな小さな赤ちゃん。体力がないのか、すぐに眠っちゃう赤ちゃんの足の裏をくすぐったり、耳に息を吹きかけるのだけれど、なかなか母乳を飲み続けることができなくて、お母さんは苦勞していた。助産婦は授乳のポジションを「肩に力が入っていると疲れちゃうわよ。もっと肩をおろして」と、とても細やかに指導していた。この赤ちゃんがちゃんと飲めるようになって体力がついたら退院できる。

この後高血圧が続いて体もむくんでしまっている褥婦と、入院3日目で出血が気になってる褥婦のケアを見学させてもらった。どの人も早く退院して家に帰りたいと助産婦に訴えていた。

数時間いただけなのに、初めての病棟体験で緊張したのかとても疲れてしまって、大学から指定された終了時間3時半にすぐさま帰宅した。シャメリーはその日、夜8時に「帝王切開見ちゃったー」と疲れながらも興奮して帰って来た。